

30年以上まえ山形県の特殊学校には養護・(ポツ)訓練と配慮養訓という考え方があり、それを行ってきました。この二つを知る現役教師はもう僅かでしょう。特に配慮養訓は通常の教科の中に障がいに対応する配慮や訓練を計画的に加味します。今の個別の教育支援計画的な要素がありました。

個別の支援計画が打ち出され検討段階で言われた事を覚えています。詳細にならない過度にならない。使うことが目的だから。制作することが目的やゴールにならないように、と。

時が過ぎて現場ではどうですか。

これは2017年東北特別支援研究協議会 岩手大会の中・高部会で出された資料です。

支援計画の制作に時間と労力をかけていて、特に特支学級では活用がなされていない、という現状です。

高校に進んだ生徒も支援計画は活用されず、保健室からの申し送りが活用されているのが現状です。

支援計画は使うためでなく、制作することが目的と評価になってはいませんか？

どうすればもっと簡素に制作でき、現場で活用できるようになるのでしょうか？

解答の一つに20年以上前からSPSSとして提唱し改訂を重ねてきたSACSがあります。

これは別項目で解説したいと思います。

また他を引用すればMSPAがあります。厚生労働省の研究の中で京都大学の船曳准教授が提唱した判断規格です。

就労現場でも移行支援計画を活用する事は稀です。対してSACSやMSPAは聞き取りで作成できて見ればすぐ状態が理解できるようチャート化されています。このように制作に過大な労力をかけず、見てすぐ理解でき活用できるものが優れた支援計画だと思います。

検討しては如何かと思います。

END

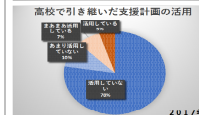
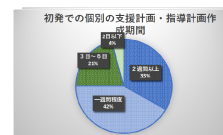
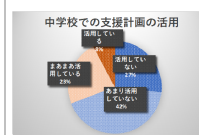
個別の教育支援計画 個別の指導計画

特殊教育の時代

養護・訓練（ようごポツくんれん）

山形では養護訓練と区分してこう呼んでいた

配慮養訓



より詳しくは東北特別支援研究協議会 中・高部会資料

中学校での支援計画活用

活用している = 31%
まあまあ活用している = 31%

支援計画指導計画の作成期間

一週間 = 75%
二週間以上 = 15%

高校で引き継いだ支援計画の活用

活用している = 12%
まあまあ活用している = 12%

保健室間の引継ぎを活用

近年

岩手県では短期間で制作できて
見やすく使いやすい支援計画に
改善しつつあると聞いている

山形県は・・・

個別の教育支援計画 個別の指導計画

2001年特別支援教育へ移行 2003年3月支援計画提言

検討段階の課題

・制作することではなく

活用する事に意義

作成しやすく使いやすいものに